

[資料]

兵庫県における梅毒患者数の推移（2007年～2016年）

秋山 由美* 山本 司 近平 雅嗣

Reported Number of Syphilis Cases in Hyogo Prefecture, Japan,
during 2007-2016

Yumi AKIYAMA*, Tsukasa YAMAMOTO and Masatsugu CHIKAHIRA

Infectious Disease Research Division, Public Health Science Research Center, Hyogo Prefectural Institute of Public Health and Consumer Sciences, 2-1-29, Arata-cho, Hyogo-ku, Kobe 652-0032, Japan

Syphilis is classified as category V notifiable infectious disease under the Infectious Disease Control Law in Japan. Numbers of syphilis cases reported in Hyogo prefecture during 2007-2016 were investigated. The annual number was 10 in 2010, which was the lowest in the last 10 years and recently doubled year by year: 42 in 2014, 89 in 2015, and 181 in 2016.

Among the age distribution of cases in 2015-2016, male patients in their 20's-40's and female patients in their 20's-30's occupied about 70% in each sex. As for the cause of infection, heterosexual contact has been increasing. In accordance with the remarkable increase in young female patient, 2 incidence of congenital syphilis was reported. Early detection and early treatment is important for preventing infection and spread of sexually transmitted diseases.

I はじめに

梅毒は梅毒トレポネーマ (*Treponema pallidum*) を原因病原体とする性感染症で、1948年から性病予防法に基づく梅毒患者の届出が開始された。1999年4月からは、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）により全数把握対象疾患の五類感染症に定められ、診断した医師は7日以内に最寄りの保健所に届け出ることが義務づけられている。

国内の患者数は1948年に20万人を超えていたが、同年の法施行や抗菌剤療法等により減少し、2000～2010年の年間報告数は500～900人であった¹⁾。しかし、2011

年から増加傾向を示し、2015年は2,690人となり、621人であった2010年の4.3倍になった。

兵庫県においても全国と同様に2011年から報告数が増加し、特に2015～2016年には大幅な増加が見られた。

そこで、2007～2016年に兵庫県内で提出された梅毒患者の発生届に基づいて、性・年齢階級別、感染原因別等による患者報告数の推移を分析したので報告する。

II 材料と方法

感染症サーベイランスシステム（NESID：National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases）に登録された2007～2016年の兵庫県内の梅毒症例データを2017年1月6日に抽出し分析を行った。

都道府県別の報告数及び人口当たりの報告数の算出には、厚生行政総合情報システム（WISH：Wide-area Information-exchange System for Health and welfare

感染症部

*別刷請求先：〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-29
兵庫県立健康生活科学研究所 健康科学研究センター
感染症部 秋山 由美

administration) 公開データ (年報) の確定版に掲載された報告数と国勢調査に基づく各年 10 月 1 日現在の人口を用いた。なお、2016 年については、WISH 公開データ (週報) の第 52 週掲載の累積報告数と人口動態統計による 2016 年 1 月 1 日現在の人口を用いた。

Ⅲ 結果

1. 年間報告数の推移

過去 10 年間の兵庫県における梅毒患者の報告数は、2010 年の 10 人が最少であったが、2014 年には 42 人、2015 年には 89 人、2016 年には 181 人と、直近の 3 年で急増し (Fig.1), 2016 年の報告数は都道府県別で全国第 6 位、人口 10 万対報告数も全国第 5 位となった。県内の人口 10 万人対報告数の推移を、全国及び患者数の多い東京都と大阪府のデータとともに Fig.2 に示した。2016 年の人口 10 万人対報告数は、全国 3.5、東京都 12.4、大阪府 6.6、兵庫県 3.2 で、兵庫県の値は全国の数値を若干下回り、過去 10 年間は全国と同様の推移を示した。

2. 性年齢階級別報告数の推移

Fig.3 に、2007～2016 年の兵庫県における性年齢階級別患者報告数の推移を示した。

男性は、2011、2013、2014 年は 30 人前後の患者が報告されたが、2015 年は 68 人、2016 年は 140 人と 2 年連続して倍増した。2016 年の報告数は全国第 5 位、人口 10 万対報告数は 5.2 で全国第 3 位と上位に上がった。年齢階級別では、20～50 歳代で顕著な増加を示し、2016 年では 30 歳代と 40 歳代が各々男性患者全体の 24%、20 歳代が 21%、50 歳代が 18% を占めた。

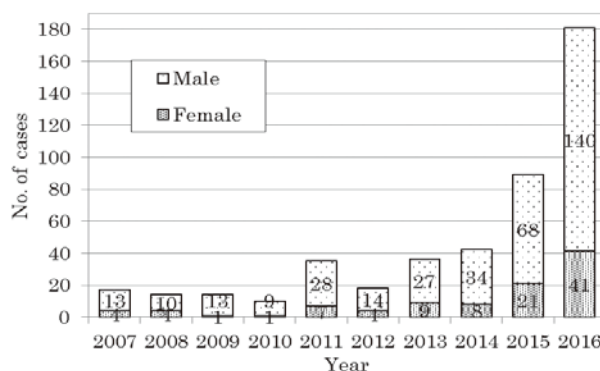


Fig.1 Number of reported syphilis cases by year, 2007-2016, Hyogo prefecture

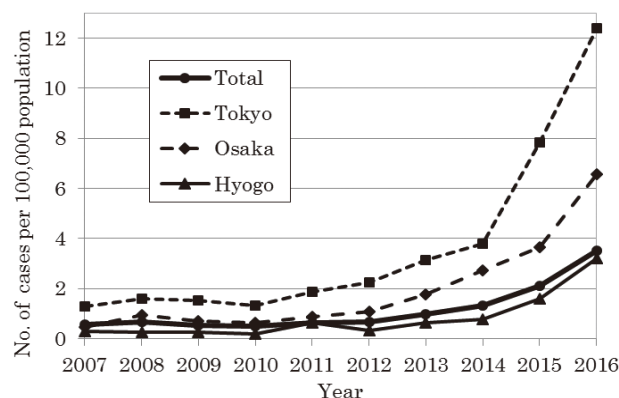


Fig.2 Number of reported syphilis cases per 100,000 population by year, 2007-2016, Japan

女性は、2014 年まで 10 人未満であった患者報告数が、2015 年は 21 人、2016 年は 41 人と著しく増加した。2016 年の報告数は全国第 8 位、人口 10 万対報告数は 1.4 で全国第 17 位となり、男性と比べると報告数は 3 分の 1 以下であった。年齢階級別では、20 歳代が顕著に増加し、2016 年には女性患者全体の 51% を占め、次いで 30 歳代が 15%、40 歳代が 12% を占めた。

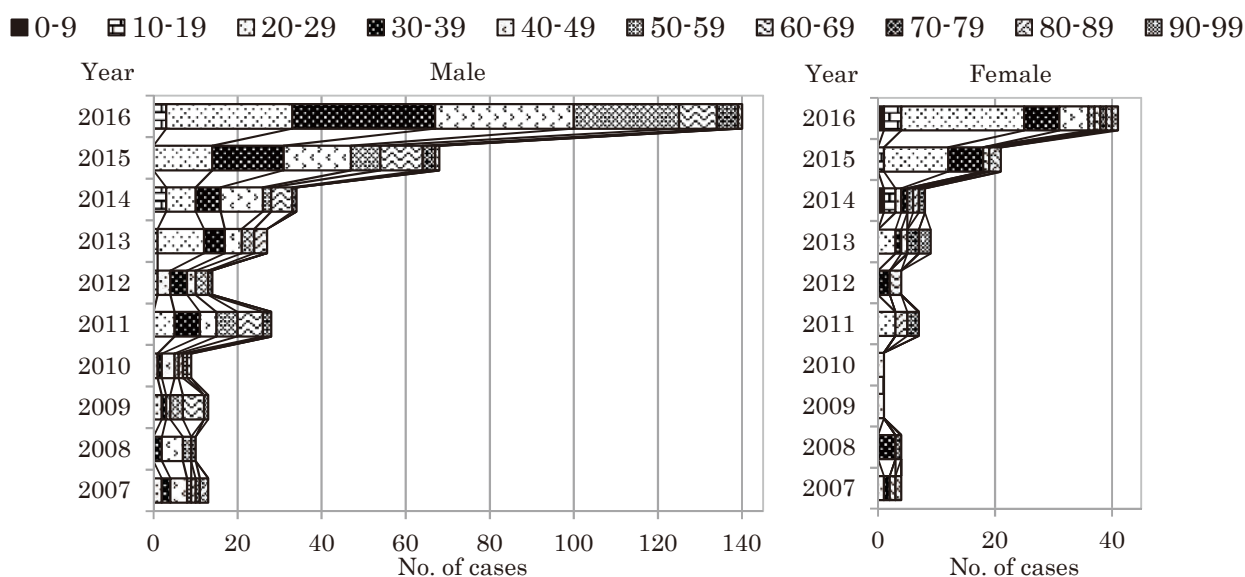


Fig.3 Age distribution of syphilis cases, 2007-2016, Hyogo prefecture

3. 感染原因別報告数の推移

Fig.4 に、2007～2016年の兵庫県における感染原因別報告数の推移を示した。男女ともに、感染原因の大多数は性的接触であり、2016年では、男性の91%、女性の83%を占めていた。

男性は、2013年をピークに同性間性的接触による感染が増加していたが、2014年以降は、異性間性的接触による感染が顕著に増加している。性的接触以外では、針治療や刺青による感染が10年間に3例報告された。

女性は、異性間性的接触による感染が大部分を占め、

2015年以降大幅に増加した。性的接触以外では、母子感染が10年間に3例（1例は無症候）報告された。

感染国は、10年間に報告された456人中442人（97%）が国内、9人が国外、5人が不明であった。国内のうち、兵庫県内での感染が310人、大阪府が36人、東京都及び福岡県が5人、その他の府県が9人で、残りの77人の感染地域は不明であった。

4. 病型別報告割合の推移

Fig.5 に、2007～2016年の兵庫県における病型別報

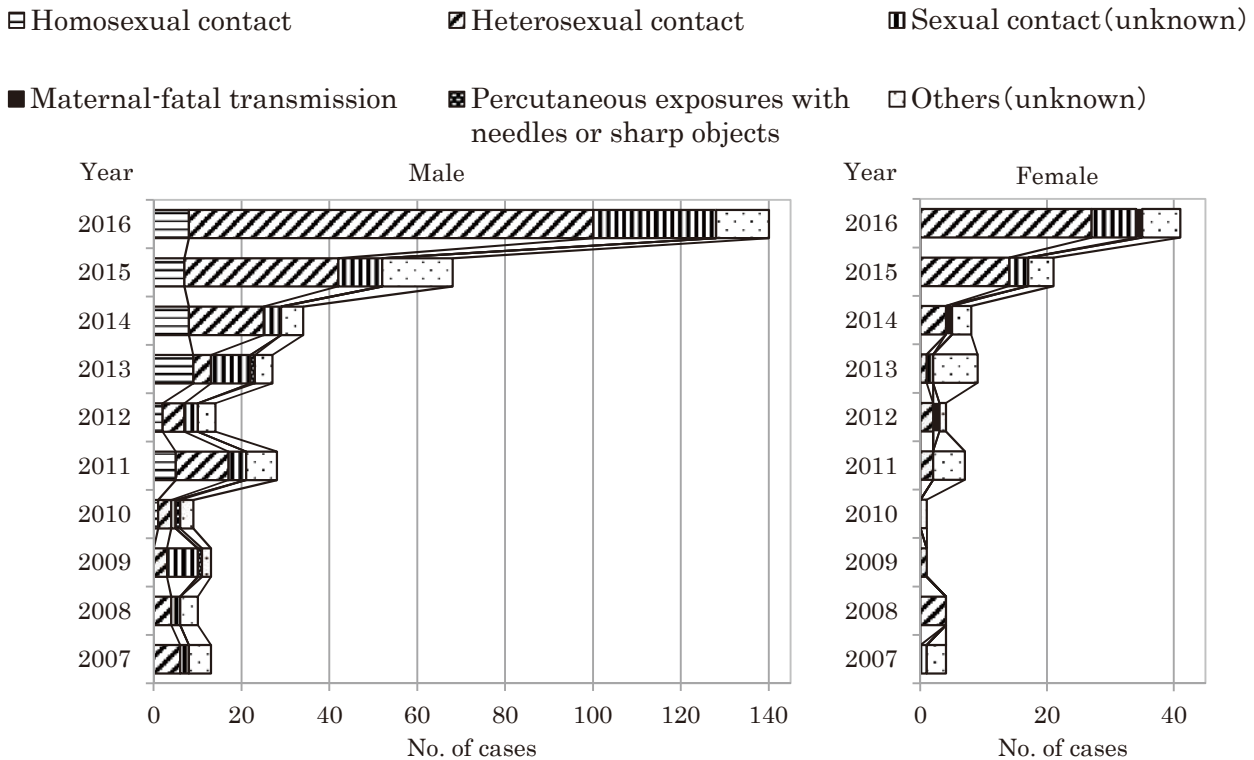


Fig.4 Distribution of syphilis cases by causes of infection, 2007-2016, Hyogo prefecture

Legend for Fig.5: Congenital, Primary symptomatic, Secondary symptomatic, Late symptomatic, Asymptomatic

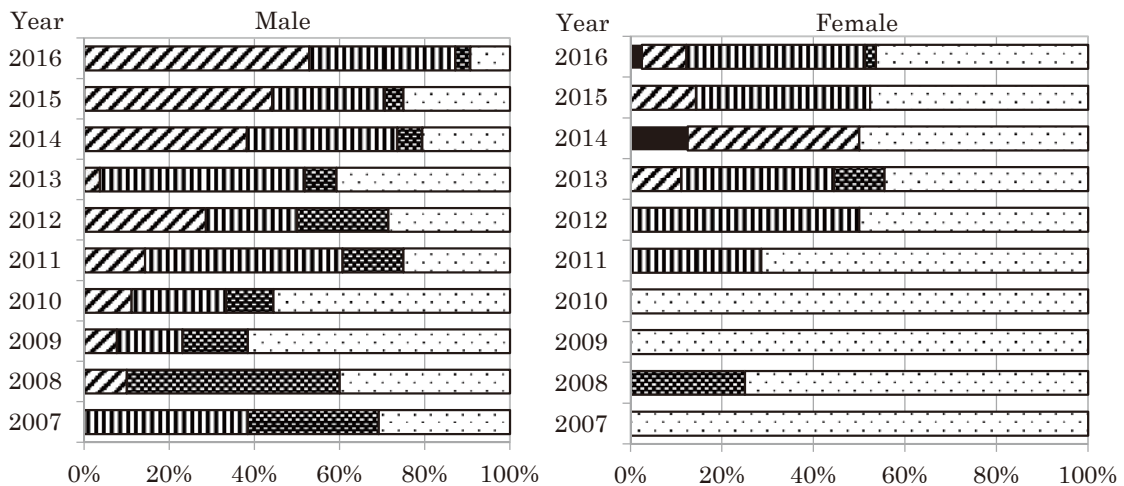


Fig.5 Distribution of syphilis cases by clinical stage, 2007-2016, Hyogo prefecture

報告割合の推移を示した。

男性は、早期顕症梅毒（Ⅰ期）の報告割合が年々増加し、晩期顕症梅毒は報告数に大きな変動はないものの報告割合は減少傾向を示した。2016年には、早期顕症梅毒（Ⅰ期）53%、早期顕症梅毒（Ⅱ期）34%、晩期顕症梅毒4%、無症状病原体保有者9%となった。

女性は、男性に比べて早期顕症梅毒（Ⅰ期）の報告割合が小さく、無症状病原体保有者の割合が大きくなった。胎内での母子感染による先天梅毒が10年間に2例報告されている。2016年の報告割合は、先天梅毒2%、早期顕症梅毒（Ⅰ期）10%、早期顕症梅毒（Ⅱ期）39%、晩期顕症梅毒2%、無症状病原体保有者46%であった。

Ⅳ 考 察

兵庫県における梅毒患者の報告数は、2011年から増加に転じ、2015～2016年に大幅な増加を示した。2013年には、同性間性的接触を原因とする男性患者の増加が見られ、男性患者の33%を占めた。しかし、この割合は同時期に60%以上を占めていた東京都²⁾や大阪市³⁾に比べると小さかった。2014年からは男女ともに異性間性的接触による患者報告数が増加し始め、2015年以降は、2014年を基準に男性は2015年2.0倍、2016年4.1倍、女性は2015年2.6倍、2016年5.1倍となった。特に、2015年の20歳代女性患者の急増は大都市に限らず全国的傾向であったため^{2,5)}、注意喚起が行われたものの⁶⁾、2016年も増加している⁷⁾。

梅毒患者の感染経路が、特定集団における同性間性的接触から、20～40歳代男性や20～30歳代女性の異性間性的接触へと一般化したことが、近年の患者増加の主要な原因と考えられる。2014年以降、兵庫県内の女性の性的接触による感染は10歳代6人、20歳代32人、30歳代11人となっている。また、先天梅毒が、2014年と2016年に県内で各々1人の新生児から報告され、全国では2014年9人、2015年13人、2016年14人と増加傾向になっている。梅毒トレポネーマは経胎盤感染することが知られており、妊娠年齢の女性の感染に適切な対策を行い、先天梅毒を生じさせないことが重要である⁸⁾。

女性は、自覚症状を有しない無症状病原体保有者も多く、感染者の約5割を占めている。感染を広げないためには、パートナーとともに検査や治療を行うことが重要である。現在、梅毒患者だけが急増しているが、これを後追いする形でクラミジアやヒト免疫不全ウイルス（HIV）などによる他の多くの性感染症の増加も危惧されることから、性感染症全体の対策が急務である。兵庫

県内では各健康福祉事務所（保健所）で、梅毒やHIVについての匿名・無料検査を実施しており、これらの施策の積極的な活用が必要である。

Ⅴ 結 論

2015～2016年に梅毒患者の報告数が急増した。性・年齢階級別及び感染原因別報告数の推移を分析した結果、20～40歳代男性と20～30歳代女性の異性間性的接触が主要な感染原因と考えられた。若い女性患者の顕著な増加に伴い、先天梅毒も2例報告された。感染拡大を防止するためには、早期発見・治療が重要である。

文 献

- 1) 国立感染症研究所：梅毒 2008～2014年。病原微生物検出情報（IASR），**36**, 17-19 (2015)
- 2) 東京都感染症情報センター：梅毒の流行状況（東京都2006年～2015年のまとめ）。<http://idsc.tokyo-eiken.go.jp/diseases/syphilis/syphilis2006/> (accessed 2016-11-28)
- 3) 細井舞子，安井典子，青木理恵，森宏美，伯井紀隆，坂本徳裕，奥町彰礼，廣川秀徹，半羽宏之，松本健二：大阪市における梅毒の発生状況（2006～2015年）。病原微生物検出情報（IASR），**37**, 144-145 (2016)
- 4) 川畑拓也，小島洋子，森治代：大阪府域における梅毒の発生状況（2006～2015年）。病原微生物検出情報（IASR），**37**, 142-144 (2016)
- 5) 国立感染症研究所：注目すべき感染症 梅毒 2015年第1～52週と2016年第12週までの疫学的特徴。感染症発生動向調査週報（IDWR），<http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2016/idwr2016-12.pdf> (accessed 2016-11-28)
- 6) 日本性感染症学会：梅毒の流行に関する注意喚起について，http://jssti.umin.jp/pdf/baidoku_cyuikanki160412.pdf (accessed 2016-11-28)
- 7) 国立感染症研究所：注目すべき感染症 梅毒 2016年第1～47週までの疫学的特徴。感染症発生動向調査週報（IDWR），<http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2016/idwr2016-48.pdf> (accessed 2016-12-16)
- 8) 国立感染症研究所：先天梅毒の動向（2011～2014年）。病原微生物検出情報（IASR），**36**, 230 (2015)

（平成29年2月27日受理）